

「松姫峠は俺に何をさせようとしているのか!」

～よびよびらん～

1ねん 5るい みうらつぬひ3

予備予備ランが行なわれたのは、7月6日の日曜日でありました。最初の予定では6月29日の日曜日にやるはずだったのですが、雨のために一週間延期されたのでした。

さて、当日はよく晴れた日でした。大学に入るまでサイクリングの経験のなかったぼくにとって、輪行は初めてのことだったので、不安で前日はよく眠れませんでした。今思えば、これがあの呪わしい悪夢のようなできごとの

第一の原因になっていたのでありました。睡眠不足で食欲のなかったぼくは、朝めしになんとカップラーメンなどを食べてしまったのです。これが第二の原因となったことは疑いようのない事実であります。

行先は松姫峠という所で、中央本線の猿橋駅に集合することになっていました。東久留米に住んでいるぼくは、清瀬に住んでいる立山くんと一緒に行くことにしていました。余談になりますが、立山くんは都立国立高校の出身で、彼の学校とぼくの出身高校である都立立川高校は、東京の多摩地区で12辯として一緒に扱われている、いわば兄弟校のような関係なのです。(もちろん立高が“兄”で国高が“弟”なので

ありますが。) そして東久留米市と清瀬市は隣接していて、こちらも兄弟の
ような関係にあるのです。これはな
んとまあ奇遇ではありませんか。さら
に言うと、彼のG.F. (高校時代の) は
なんとぼくの出身中学である、東久留
米市立大門中学校の出身なのです。こ
うなるともう、ぼくと彼は運命の糸で
結ばれていると言っても過言ではな
いでしょう。(この運命の糸に操られて、
ぼくはサイクルサッカーをやるはめに
おちいったと言えるでしょう。)

余談が長くなってしまったのでこの
へんでやめにして、本題に戻ることに
します。家を出たのは7時過ぎ頃だっ
たでしょうか。初めてかついだ鞆行袋
の重かったこと！ 駅まで普通に歩けば

10分で行けるのに、その倍くらいかかってしまいました。彼との待ち合わせ場所である武蔵野線の新秋津駅に着いたのは7時半頃だったと思います。彼は家から新秋津まで自転車に乗ってきたらしく、ちょうど輸送を終えようとした所でした。ここでまた余談になりますが、ぼくは高校時代にこの武蔵野線を使って通学していました。（もちろん彼もそうですが。）この武蔵野線は、一応国電ということになっていますが、実体はローカル線に等しく、多い時で1時間に3本、少ない時は1時間に1本しか走っていないのです。おかげで高校時代は寒風吹きすさぶ中、駅のホームで20分以上も電車を待つことがしばしばあったのでした。

さて、武蔵野線に乗りこんだぼくたちは、10分ほどして西国分寺に着くと、中央線に乗りかえて高尾まで行きました。高尾に着くと、ホームにはすでに先輩や他の1年生がいました。高尾発の普通列車に乗り、猿橋に着いたのは9時半頃だったでしょうか。駅の外に出てみると、もうすでにたくさんの先輩たちが来ていました。ぼくたちはすぐに輪行を始めましたが、初めての輪行だったぼくは、悪戦苦闘して何とか自転車を組み立てたものの、他の人の2倍くらい時間がかかってしまいました。

記念写真を撮影して出発。新歓ラウンドですでに先輩たちや他の一年生に比べて“リキ”に劣ることを自覚していたぼ

くは、果たして峠なんか自転車で上ることが出来るのだろうかという不安を抱きつつ、ペダルを踏んでいました。峠までの道は、途中砂利道の所もありましたが、ほとんどが舗装された道でした。最初のうちはそれほどきつい上りでなかったため、おく山なぐるも何とかついていくことができました。何せこの1年運動ろしい運動をしていなかったのですから、リキがないのも当然といえば当然の話。中学・高校とバレーボールをやっていたので、少々のことなら大丈夫とたかをくくっていたのですが、新歓ランでそれが全くの誤りであることを悟りました。負け惜しみになりますが、今から考えると、自転車をこぐのには、一種のコツのよう

なものがあるのではないのでしょうか。^{もし}
もちろんリキがあればそれにこしたこ
とはないのですが、リキがなければな
いなりに、それに相應の走り方があるよ
うに思います。リキがないのに一生懸
命力を入れてペダルを踏んではすぐに
疲れてしまいます。その時のぼくはま
さにそうでした。

途中2、3回休憩がありました。そ
のたびにぼくは、つりそうになる足を
さすり、慣れない前傾姿勢で痛くなっ
た腰を伸ばしながら、ドタッとすわり
こむ寸前の状態でした。最後の全体の
休憩はどの辺だったのでしょうか。部長
の三浦さんが、「ここからは上りがき
つくなるから、途中休憩してもいいか
らみんな自分のペースで上るように。」

と言いました。ここまでは、ビリの方ではありましたが、何とか上ってこられました。そうです、悪夢はここから始まったのです！まわりでは、みんなパンやおにぎりなどを食べていました。何しる朝めしにカップラーメン1個しか食べていなかったのですから、当然ぼくもおなかがすいていました。しかしお弁当がおにぎりではなかったため、食べるのが面倒くさくて結局何も食べなかったのです。今考えると、これが最大の敗因でした。パンやお菓子を持ってきてくればよかったのに！何しろこいほど長い坂道を自転車で上ったことなどなかったので、こんなに疲れるものとは思っていなかったのです。睡眠不足の上に腹ペコではとてもリキがでる

わけはありません。それだけでなくともりキがないのに。余談になりますが、この事件以来、ぼくは必ずフロントバッグにパンを常備するようになりました。そして休憩するときはもちろん、走りながらもパンを取り出して食べるようになったのでした。(これは夏合宿でぼくと一緒だった人に聞いてもらえばわかるでしょう。)

さて、空腹のまま再び走り出したぼくは、それでも最初のうちはないりキを振りしぼってペダルを踏んでいました。もちろんインナーローですから、なかなか前に進みません。そのうちインナーローでもペダルが重く感じられるようになってきました。頭ではペダルを踏もうと思っているのに、足が思

うように動きません。そうこうしているうちに1回目のダウン。少し休んでまたこぎ始めましたが、しばらく進むとまた足が動かなくなってくる始末。休憩とペダル踏みを繰り返すうちに、休憩時間とペダルを踏む時間は反比例して、休憩時間だけがどんどん長くなるばかり。休まないではいろいろなほど足がだるくなってしまったのでした。そのうちに、三浦さんと斉藤さんに追いつかれました。何をかくそう、2人はスィーパーとして一番後ろからやってきたのでした。つまりぼくは完全にビリになってしまったわけです。その時ぼくはもう完璧に終わった状態でした。2人の手前何とか自転車に乗らなければと思って必死にペダルを踏むの

た。2人は「もうすぐ頂上だからがんばれ。」というようなことを言っていました。その言葉も頭に入らなくなり、暑さのせいもあって、頭がボーッとして目の前が暗くなり、ついに本当にダウンしてしまったのです。自分ではわからなかったのですが、道路のまん中に大の字に寝っころがってしまったのだそうです。

それから先のことはもう書くにしのびありません。倒れた場所は本当に頂上のすぐ近くだったらしく、2人が助けを求めて叫ぶと、立山さんと嶋田くんがわざわざ助けに来てくれました。もう何が何だかわからないままに自転車を押して行くと、前方にたくさんの人たちが見えました。最後の方を振り

しぼって自転車にまたがり、ペダルを踏んで、やっとこさ頂上に着きました。もうろうとした意識の中で、「松姫峠」という石に彫られた文字を見た瞬間、「ああ着いたんだな」という何とも言えないぼったとした気分になりました。そのあとどうなったかについては、写真を見てもらえばわかりますので、ここでは省略させていただきます。

全く悪夢としか言いようのない一日でした。多大な御迷惑をおかけした部員みなさんに深くお詫びいたします。最後までぼくを見捨てず一緒に走ってくれた三浦さんと斎藤さん、本当にありがとうございました。あの時おふたりがいてくれなかったら、現在のぼくはなかったでしょう。やっぱり先輩は

いいなあ。ぼくも後輩からそう思われるような先輩になりたいと思います。最後に、この体験でぼくが得た貴重な教訓をしるすことによって、この文章を終わらせていただくことにします。

気をつけよう？

急な坂道とカップラーメン！！